

使徒言行録 「パウロの回心と働き」

司祭 ヨハネ 井田 泉

「使徒言行録」は「ルカによる福音書」の続編として、紀元 90 年頃、同じ著者によって書かれました。このように始まっています。

「1:1 - 2 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」

第 2 巻にあたる使徒言行録には、最初にイエスの昇天、聖霊降臨、それに続く使徒たちの働きが語られています。少々理想化されているとも言われますが、最初の教会の姿を生き生きと描き出しています。大きく言えば前半の中心人物はペテロ、後半はパウロです。

今回はまず、主イエスの昇天とそれに続く聖霊降臨の出来事に触れ、最初の教会の姿を見つめてみましょう。その後、キリスト教を広い世界に伝えることになったパウロ（サウロ）の回心の出来事に焦点をあて、そして回心後の彼の多くの働きの中から一部を見つめてみることにします。

1. 主イエスの昇天と聖霊降臨

「1:3 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」

使徒言行録によれば、復活されたイエスは、四十日にわたってたびたび弟子たちに現れてご自身が生きておられることを示し、神の国について教えられました。

イエスが弟子たちに対し、期待して祈り求め、待ち望むように言われたのは、聖霊です。

「1:8 『あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。』

1:9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」

弟子たちはイエスを天に送った後、たびたび集まって一緒に聖霊を祈り求めました。

「1:14 彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」

この祈りの群れの中に女性たち、ことに愛する子の命を奪われたマリアが毅然と存在していたことは非常に重要と思われまます。

10 日後の日曜日、イエスの約束が実現します。

「2:1 五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、

2:2 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。

2:3 そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

2:4 すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」

聖霊降臨の出来事です。心を一つにして祈っていた群れは、天からの音を聞いた。神の激しい息吹を受けた。神の燃える愛の火を共に経験しました。聖霊は弟子たちを動かして、宣教へと駆り立てました。通じるはずがないと思うのに、言葉が通じていきます。福音の内容であるイエス・キリストが伝わっていきます。人の力と知恵を超える聖霊が働かれたからです。人々はイエス・キリストにおける神の愛と救いを受けました。しかしそれは同時に、自分の過ちを照らし出され、心が突き刺される経験でもあったのです (2:36-37)。

ペテロの説教を聞いて多くの人々が洗礼を受け、その日、3000人ほどが仲間に加わったとあります (2:41)。この日をわたしたちは教会の誕生日、「聖霊降臨日」として記念しています。

2. 最初の教会とステファノの殉教

その続きに、最初の教会の様子が記されています。

「2:42 彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」

今日の教会にこれを回復したい。「使徒の教え」つまりイエス・キリストの福音です。それを語り聞き、分かち合うことが教会の中心にある。「パンを裂くこと」。これはおそらく、信仰の交わりとしての食事（愛餐、アガペー）と聖餐式がまだ一体であったのでしょう。

「2:43 すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである。……2:46 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、2:47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」

このあとすぐ、教会は迫害を受けます。ペテロが神殿で足の不自由な人を癒したことがきっかけとなって、イエスの名によって語ることを禁じられ、脅迫されるのです。しかし信徒たちは神を呼んで切に祈ったことをとおして、新しく神の力づけを受け、「聖霊に満たされて」(4:31)、いっそう大胆に神の言葉を語り始めます。

さて、最初の教会内に起こった食べ物の分配の問題の解決のため、また新しい指導者の必要から7名が新しく選ばれました。そのひとりがステファノ（ステパノ）です。彼は神の霊と知恵に満ちた人でした (6:3,10)。彼はエルサレム神殿とそれに依拠する指導者たちを厳しく批判したため、激しい憎しみを買い、石で打たれて殺されました。最初の殉教者です。

「7:55 ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、7:56 『天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える』と言った。

7:57 人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、7:58 都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。

7:59 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、『主イエスよ、わたしの霊

をお受けください』と言った。7:60 それから、ひざまずいて、『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。」

ステファノの最期とその祈りは、イエスと最期とその祈りと思わせます。イエスの霊がステファノに働いていたに違いありません。

そのステファノの殺害に荷担したひとりがサウロ（パウロ）でした。

3. サウロの回心

「8:1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。」

サウロたちにとっては、イエスを信じるグループ（最初のキリスト教会）はユダヤ教の中に生じた許しがたい異端でした。なぜなら人間であるはずのイエスを救い主、神の子と信じ、しかも神聖なエルサレム神殿を冒瀆する者たちであったからです。もっとも最初の教会は全体としてエルサレム神殿を否定したわけではなく、考え方の幅がかなりあったようですが、ここでは深入りしません。

続きを読みましょう。

「(8:1) その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。8:2 しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。8:3 一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた。」

サウロの回心の記事は次の第9章です。

「9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。

9:3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。9:4 サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。

9:5 『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。9:6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。』」

彼は天からの強い光を受けて地に倒れ、イエスの声を聞きました。

「9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。9:8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。

9:9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。」

ここで彼が経験したのは恐ろしい闇です。自分がこれまで正しいと思って命をかけてしてきたことが、間違いであったのか、という絶望的な苦しみです。わたしの想像ですが、サウロには、あのステファノの死の場面がよみがえってきたのではないのでしょうか。自分は何の罪もない人の

殺害に荷担したのではないか。神から遣わされた人を迫害し、苦しめ、死に追いやってきたのではないか。

目が見えなくなった、というのは現実の肉眼のことであるとともに、彼の一切の考え、判断、言わば霊の目がまったく見えなくなった、ということでしょう。否、そもそもこれまでずっと見えていなかった。神に従っているつもりが実際は神に敵対し、罪のない人を殺してきたのが自分なのです。

そう思ったら、もう自分には生きる資格はない。生きることは許されないと感じます。

「9:9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。」

とはそういうことではないでしょうか。

しかしここで神は彼を見捨てられませんでした。イエスは、ひとりの弟子アナニアに命じて、サウロのところに行くように命じられます。

「9:10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、『アナニア』と呼びかけると、アナニアは、『主よ、ここにおります』と言った。

9:11 すると、主は言われた。『立って、“直線通り”と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。9:12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。』」

しかしアナニアはサウロに会うのが恐ろしい。

「9:13 しかし、アナニアは答えた。『主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。』」

しかし主の決意はかたく、こう言われました。

「(9:15) 行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」

こう命じられてアナニアは、主の言葉に従ってサウロのところに行きます。けれどもアナニアは恐ろしかった。気持ちとしては逃げたかった。どんなに勇気がいったでしょう。ただ主の言葉にすがって歩を進めた。そしてもうひとつ「今、彼は祈っている」と聞いたことが、アナニアの足を前に向けさせたのではないか、という気がします。

「9:17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。

『兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。』」

アナニアはサウロの上に手を置いて祈りました。「兄弟サウル」と呼びかけているのが印象的です。これまではおそろしい敵であった。しかし主イエスのゆえに、今は兄弟なのです。

「9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるように

なった。そこで、身を起こして洗礼を受け、9:19 食事をして元気を取り戻した。」

彼の霊の目を見えなくしていたものは取り除かれました。今や彼は、神を知り、イエス・キリストを知り、自分を知ったのです。目から落ちたうろことともに、彼のかたくなさ、傲慢は溶かされ清められ、自責、絶望は取り除かれた。代わりに与えられたのは、赦しと新しい使命です。

ここで洗礼を受けたことが記されているのも印象的です。洗礼の水をくぐって、彼は古い人として死に、イエス・キリストと一体とされた新しい人として再生したのです。

同時に「食事をして元気を取り戻した」と、具体的に書かれているのも興味深い。

これがサウロ＝パウロの回心の物語です。これはもちろん神が、イエス・キリストが、聖霊が働かれて起こったことです。言わば決定的な、神による奇跡の出来事です。しかし同時に、アナニアの決意と働きがあつてこそ実現した。さらにあの石で打たれて血を流して死んでいったステファノが、死んでも彼サウロに働きかけ続けていたからこれが起こった、と思えてなりません。

ところでわたし属する聖公会の始まりにも、殉教の歴史があります。その代表的なものは、聖公会の基礎を築いた中心的存在、カンタベリー大主教トマス・克蘭マーで、1556年3月21日がその日です。トマス・克蘭マーは英国の宗教改革を推進した中心人物ですが、英国王エドワード6世が若くして死に、女王メアリーが即位すると状況は一変しました。メアリーは熱烈なカトリックで、宗教改革の一切を否定し、カトリックへの復帰を強行しました。トマス・克蘭マーは不本意にも、自分の進めた宗教改革路線が過ちであったことを認める謝罪文に署名させられました。しかしそれでも赦されず、公衆の面前で火あぶりの刑に処せられました。そのとき彼は、心ならずも宗教改革路線を撤回したことを悔いて、署名した右手を呪って、「この手が罪を犯した。恥ずべき手」と言って火の中に差し出して死んでいきました。

今は聖公会、カトリック、プロテスタントはかつてのようではなく、協力し合う時代となったことは幸いなことです。けれども聖公会に属する者としては、克蘭マー大主教が信仰的良心の叫びを残して死んでいったことを、とうとい信仰的遺産として記憶し続けたいと願います。

4. 仲介者バルナバ

パウロは回心後、これまでは迫害していたイエス・キリストの福音を、今度は熱心に宣べ伝えるようになりました。これはこれまでの仲間からは重大な裏切りと見なされたのは当然です。こうした中、パウロは彼の弟子たちにより、夜陰に乗じてダマスコの城壁伝いにつり降ろされて脱出したとされます(9:25)。

やがて彼はエルサレムに行き、弟子の仲間に加わろうとしましたが、皆は彼をイエスの弟子だとは信用せず、恐れていました。しかしイエスの直弟子を中心とするエルサレムの教会との信頼関係を何としても得たいと彼は願いました。孤立状態のままでは今後の働きを進展を見ることはまず無理と思えたのです。こうしたとき、バルナバという人が仲立ちをしてくれました。

「9:27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で

主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。9:28 それで、パウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。」

直接パウロに関することではないのですが、当時の教会の様子的一端がこう記されています。

「9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。」

「主を畏れ、聖霊の慰めを受け……」。聖霊の慰めは何ものにも代えがたい。それをわたしたちも切望します。

やがてエルサレムの北方、シリアのアンティオキアが教会の重要な拠点の町となります。バルナバは後にもう一度パウロを探しに行き、アンティオキアに連れて帰ってそこで一緒に多くの人を教えました (11:25)。

5. リディアとフィリピの教会の始まり

さてこのアンティオキアを出発地として、パウロの 3 回にわたる伝道旅行が開始されることになります。今日はその中から一箇所だけ触れることにします。第 2 回の伝道旅行のとき、パウロは始めて海を渡ってヨーロッパ世界に足を踏み入れることになりました。

それに至る箇所は次のように記されています。

「16:6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。16:7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。16:8 それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。16:9 その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った。16:10 パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。」

これは使徒言行録の著者ルカの理解の反映かと思うのですが、宣教の働きやそのための旅路を、神が禁じられることがある、というのが印象的です。こういうことがあり、マケドニアの人が自分たちを求めているという幻を見て、パウロたちはヨーロッパに渡る決心をします。

教会の会議や計画があまりに人間の考えと営みだけになってしまわないようにと、この箇所は呼びかけているようです。

「16:11 わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、16:12 そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリピに行った。そして、この町に数日間滞在した。」

こうしてヨーロッパに渡ったパウロとシラスは、フィリピに滞在して伝道のきっかけを得ようとし、ある安息日（土曜日）にフィリピの町の門を出て、どこかに祈りの場所があるのではないかと、彼らは川岸に行きました。そこに集まっている女の人たちがいたので、そこに座って

話をしました。その中にいたのがリディアという人です。

「16:14 ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話に注意深く聞いた。

16:15 そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、『私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください』と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。」

福音がどのように伝わっていくか、ということは人間の思いと力を超えています。ここでは「主が彼女の心を開かれた」という言葉が印象的です。このための祈りの大切さを思わされます。

全体をとおして、神が、聖霊が働いておられるのですが、その中で思いがけない人の熱心が注目を引きまします。ここではその女性リディアです。無理にパウロたちを家に招いて泊めるのです。このリディアの家がフィリピの教会の始まりとなります。

しかしこれは苦難や迫害なしに起こったものではありません。

パウロたちはこの町で、占いの霊に取り憑かれた女奴隷と出会いました。彼女はパウロたちについて来て連日こう叫ぶのです。

「16:17 この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」

現実にはこれが非常な妨げになってしまうので、パウロはその人から占いの霊を追い出してしまいます。するとその占いで儲けていた主人たちは金儲けの手段がなくなったものですから、憤ってパウロとシラスを捕らえて役人に引き渡してしまいました。二人は衣服をはぎ取られ、何度も鞭で打たれ——これは主イエスの受難を思わせます——投獄されてしまいました。彼らは一番奥の牢に投げ込まれ、足には木の足かせをはめられました。

ところが二人は意気消沈しません。真夜中の牢獄で賛美の歌を歌って神に祈るのです。他の囚人たちはしーんとその歌と祈りに聞き入っていました。そこに地震が起こりました。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまいました。

「16:27 目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思いい込み、剣を抜いて自殺しようとした。16:28 パウロは大声で叫んだ。『自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。』」

16:29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、16:30 二人を外へ連れ出して言った。『先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。』16:31 二人は言った。『主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。』16:32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。

16:33 まだ真夜中であったが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。16:34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。」

これもフィリピの教会のもう一つの起源です。

後にパウロは、成長したフィリピの教会に宛てて祈りと愛をこめて手紙を書いています。

6. 繰り返されるパウロの回心の物語

こうしてパウロは各地に教会を設立し、キリスト教が世界に広まる基礎を築いた人ですが、いつも力に溢れていたわけではありません。

「18:9 ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。『恐れるな。語り続けよ。黙っているな。18:10 わたしがあなたと共にいる。』」

彼自身、弱さを抱えた人間として、神によって励まされる必要があったのです。

3 回の伝道旅行を重ねたパウロはやがてエルサレムで逮捕され、取調べを受けることになりました。その過程で、彼は二度にわたって自分のかつての回心のことを話します。ひとつは 22 章です。もうひとつは 26 章です。26 章のほうを少し引用します。

「26:14 私たちが皆地に倒れたとき、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか。とげの付いた棒をけると、ひどい目に遭う』と、私にヘブライ語で語りかける声を聞きました。

26:15 私が、『主よ、あなたはどなたですか』と申しますと、主は言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

26:16 起き上がれ。自分の足で立て。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たこと、そして、これからわたしが示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人にするためである。」

同じ回心の物語の 3 回目なのですが、ここの表現は特徴的です。

「26:16 起き上がれ。自分の足で立て。」

これはイエスが生前に人に働きかけられたことと通じるのですが、さらに旧約聖書にもつながります。紀元前 6 世紀、エゼキエルという若者が、イスラエル王国が滅亡して異国バビロンに捕囚の身となり、自分の民族の未来も自分自身の未来の希望も断たれて、ケバル川という運河のほとりにうなだれていました。そのとき、嵐の中に神が現れるのです。そして彼に言われます。

「2:1 彼はわたしに言われた。『人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。』」

2:2 彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。」

ここに聖書全体を貫く思想というかメッセージがこめられています。

「自分の足で立て」と言うのは自立、主体的生き方を促すものです。

しかし聖書は一方、人間の弱さと限界を知っています。「自分の足で立て」と言われて自分ではどうすることもできない。それに神の霊が働きます。神の霊はエゼキエルの中に入って彼を自分の足で立たせ、また神の霊はパウロに働きかけて自責と絶望から救い出し、新しい命を吹き込んで彼を立ち上がられたのです。

そのことはわたしたちにも無縁ではありません。神はわたしたちを自立と主体的な生き方へと促すと同時に、それを可能にする力を与えてくださるのです。

パウロをはじめとする使徒たち、また最初の教会とわたしたちは、イエス・キリストに集められ、聖霊の働きを受けるものとしてつながっています。使徒言行録に記された聖霊の命と力をわたしたちも新しく知りたいと願います。